

平和人権教育研究部会

I 部会研究テーマ

「平和・人権・国際連帯・環境教育の教材発掘と研究」

II 研究テーマ設定の理由

平和人権教育部会では、本年度の研究を進めるにあたり、「戦後70年をどうむかえるか」を主な研究内容とし、以下の問題意識の元、活動してきた。

- ◎ 「甲府空襲」を中心として、先の戦争を伝えていく、語り継いでいくことは、今を生きる私たちの責務である。
- ◎ 戦争を体験として語れる人がいなくなる中で、戦後生まれで戦争を知らない私たちの世代が、戦争をどう伝えていくのか。戦争を知らない私たちが、実感を伴った平和学習をどうつくっていくのか。
- ◎ 来年の「戦後70年」を、どうむかえ、そしてその後はどうつなげていくのか。

III 研究の経過と内容

1 経過

- 4月10日（木） 研究テーマ・研究内容・組織等の決定
- 5月15日（木） 今年度の研究について
- 6月17日（火） 研究計画の確認及び実践報告会
- 8月7日（金） 臨地研修 平和ミュージアム見学
- 8月20日（水） 臨地研修 南アルプス市「ロタコ（御勅使河原飛行場跡）」
- 9月4日（木） 県教研レポートについて①
- 10月2日（木） 県教研レポートについて②
- 11月4日（火） 県教研還流報告、毎日新聞記者を講師に学習会
- 1月27日（火） 今年度のまとめと来年度の方向性について

2 内容（実践事例と活動内容）

（1）学校集会「もうひとつのたなばた」の読み聞かせ（新田小平和集会）

甲府空襲の時期に合わせて、学校集会でその「もうひとつのたなばた」の読み聞かせを7月10日木曜日の朝の学校集会（約20分間）で実施した。昨年度の部会での討議から、戦争を知らない世代が戦争を語り継ぐ時のツールとして、プラネタリウムが非常に有効であることが出た。暗く閉じた空間の中で投影される紙芝居と音響の効果により、見ているものを物語の中に引き入れ、より物語を深く感じられることである。その事を利用するため、紙芝居をパワーポイントに収録し、暗幕で暗くした体育館でプロジェクターにより大型スクリーンに投影した。また爆撃音等の音源を読み聞かせに挿入し、より空襲の恐ろしさを実感できるよう用意した。成果としては、体育館を暗くし、プロジェクターで映したことにより、物語に引き込まれたこ

と。また爆撃音などの音響を入れたことで、子どもたちはより空襲をリアルに感じたことなどが挙げられる。課題としては、毎年計画的・継続的に行うためには、年間指導計画、教育課程にしっかりと位置付ける必要がある点や、児童会等子どもや保護者と共に創り上げていけるような集会にする必要があること等である。

(2) 科学館への働きかけ ～甲府空襲をプラネタリウム番組に～

科学館では2011年7月7日、翌2012年8月15日に甲府空襲展にあわせて、プラネタリウムを利用した「もうひとつのたなばた」の読み聞かせを行った。(主催：甲教組)

本年度は甲教協として科学館に「もうひとつのたなばた」の上演を打診したが、科学館側の問題で開催ができなくなった。再度の開催のお願いと、「もうひとつのたなばた」をプラネタリウムの番組にして欲しい旨の要望を甲府市教育協議会平和人権教育部会、そして「教育4者」として要望した。残念ながら「プラネタリウム番組としては採用できない」という回答だったが、「もうひとつのたなばた」の読み聞かせの実施は了承を得た。来年度の戦後70年の一つの「目玉」として実施していく予定である。またその集いの充実を通してプラネタリウムの番組化を科学館側に粘り強く訴え続けていき、実現に向かっていければと考える。

(3) 臨地研修1「ロタコ」見学

甲教組青年部に夏の学習会に「平和学習」を呼びかけ、本年度の夏期学習会はロタコ見学に決まった。本部会もその学習会に参加した。(ロタコ飛行場跡「アジア太平洋戦争末期、旧日本軍によって御勅使川扇状地に飛行場(暗号名：ロタコ)」)

見学当日南アルプス市教育委員会の田中さんが案内してくれた。田中さんは、冒頭に「戦争遺跡は「もの」が戦争を語っていく時代に入ってきています。」と話した。パワーポイントでの説明後、車で広大なロタコ戦跡群を案内して頂いた。飛行場跡に立ったり、作業場(軍需工場)として作られた横穴群、飛行機を格納するための掩体壕等を見たりした。ふれあい情報館では、当時作っていた飛行機の胴体部分の部品に触れた。朝鮮人労働者・軍属の人たちが使っていた名入りのお椀を持った。それらは生々しい感覚として体験することができた。これらに関する証言はなくても「もの」から様々な事が伝わってくる。「『もの』を通して人間の歴史を学ぶ」。これからの平和教育、平和学習のあり方を考えさせられる臨地研修になった。

もう一つ強く感銘を受けたのは、行政サイドで、戦績の保存、広報、学校への働きかけなどを積極的に行っていることだった。田中さんは「南アルプス市では徳島堰の事は、『俺たち学校で堰のこと勉強したよなあ。』という声を誰からも聞くことができます。同じように、『ロタコ、勉強したよなあ。』という声を、本市出身の誰からも聞けるようにしたいと思っています。そのために、学校と連携をとっているところです。」と言う。地元の子なら誰もが、あたりまえに地元の戦跡に触れ、戦跡の授業を受け、そこから戦争や平和を考える。「あたりまえに行われる平和教育」に取り組もうとしている、南アルプス市教委、そして田中さんだった。

(4) 臨地研修2「山梨平和ミュージアム」見学

山梨平和ミュージアムは、私設の戦争博物館である。見学当日は浅川保館長が案内・説明してくれた。今回改めて感じたのはあまり知られていない甲府連隊のことである。甲府という

地元の軍隊施設がどのような役割をし、どう歴史にかかわってきたのかを知り、学ぶことは現在に通じると思った。翻って北富士はどうだろう。北富士に駐屯する部隊がどんな部隊で、どんな役割を担っており、世界情勢や社会情勢にどうかかわっているのか私たちはほとんど知らない。地元山梨にある演習場と駐屯地について、無関心ではいけないことを、甲府連隊の歴史に触れて感じてきた。今後の大きな課題である。平和ミュージアムでは、戦後70年に向けて戦争体験集の出版を行う予定とのことだった。戦争体験者からの証言を得られる時間が残り少なくなっている中、大切な取り組みになるだろう。

3 戦後70年、そしてその後に向けて

市の指導主事や県教組教文部長、甲教組書記長等も交えて、以下の意見交換を行った。

- ◎ 甲府空襲を次の世代へと語り継いでいくのは、現在を生きる私たちの責務。
甲府空襲を学ぶことが「あたりまえ」＝文化として根付くよう取り組んでいく。
- ◎ 甲教組の取り組みとの協働（甲教協平和人権教育部会との連携）
 - 「すべての学校、すべての教室で、すべての子どもたちと共に学ぶ甲府空襲、平和教育、一校一実践、一人一実践」を呼びかける。
 - 「一校一実践、一人一実践」を行いやすい環境づくりと、具体的なサポート。
 - ① 教育課程への位置付け ② 教材の収集、提供、紹介
 - 甲教組「平和教育推進委員会」の機能・役割を活用

IV 研究の反省と課題

今後は、述べてきた内容を「戦後70年」に向けて進めていくことになる。「戦後70年」を子どもたちと教職員みんなで考えられるような環境づくり、働きかけをしていければと思う。

甲府の小中学校で、甲府空襲・平和学習が学びのサイクルの中に取り入れられ、あたりまえに平和教育が行われる。そしてそれが戦後70年から80年、90年、100年と引き継がれ、平和を希求する子どもたちがその想いを持って社会に出て行き、そしてその子どもたちが主役となって平和な社会を築く担い手となっていく。その担い手が持つ力は、平和を壊すような動きに抗う大きな力となるだろう。

秘密保護法の制定、集団的自衛権の行使容認、憲法「改正」への動き等々があるの現状の中、部会として来年度「戦後70年」にむきあっていければと思う。